ゑち薩柄 より

薩摩飯は魚田にかしこ 我は緑楽饅を足
摺てたり されど 汁すゝ 陣を引て 穂出
の中に気をまつめたば 夕見よ 硯をま
賞の若座敷に大目頃の唐言は御合せ
一段切にまみれて景の踏所は切に日 親族の
人こそたじめ 世話の奴原に後指をさゝれ
人を耻かしく 茲に再拳を計るは了ゝに面
を曝しける武士の意地づく 切りまし 膳は奴
との一言は芋畔を知らさるものにして 秋膳中
既に おかめ切し おつや切し おすま切し お○○切し
緑楽狩の娼は悪く見切りけり
所よりたつ人なれば 精進の梅の花代

彼が
山留守にまかりて 昔合を忘れしとは 何とも言ふ妄言ぞ
二十一 終日の切切の身は声く喰ふ傍に 白糸に名の秋
に論は出せる書千の清思いつも 他なる心とは
思ひけれ 言はゞ 程の深き恩 さて薩摩の人が 落す
づきもづもし さていは 薩摩殿を 歎くる 居し
されば 薩摩の恩を 知らざれば 切りの秋は
与する 給へど 一小田へ 其之は路傍の名 し笑子で
るにて 下切り は胸裡の玉 捨てゝ叶ふべきや
是に思せよかし

所の 留守とは 隠す [illegible] 雲の岑
山は 寺嶋の嬢子切られし 清淑の乙女切られし
二人の中に関格之し は 何事の嬉之助の仕業で 蘚
は 於とらなし
太良殺 有 帰るは 遅し 夏の雷

山ハ可憐の孃子なるべし　法溺の工なるべし
天下ハ小閑稽古ハ何ものの暗を助の仕業を舞廣
ハ為らんか

春良寂者　帰るい雁　夏の雪

清風茅を破りて知い紙面の
人を知らず　直に行塵紫
塵の中　立て直眼の涙
思ハ者く綽約の姿の源を
高らで　丈夫一国に関る鉄鞭
なて　てもかるこ口を城眉い
祈る　皓歯い辞くべ
焼て粉みて河で春て
後ハ合ら離ら　吐哉
磯辺なて我が曲鳥を鷹ふ足
ら我が痴骨を治ふ足
時て地獄を逃て　行国雁月
ものが為ハ
まを割て夏ハ
思ハ行すハ

特別
文庫14
C22